

メールレター(34)

トロント

冬時間に切り替わったばかりの11月の初旬のことです。初雪の薄化粧のモンリオールを後にして、トロントに向かいました。高速をただひたすら西に真っ直ぐ、570キロ走り続けます。

「わあーこんな素敵な風景の中を走るなんて」

ドリトル先生はハンドルを握りながら大喜びです。

モンリオールを出て100キロを過ぎた頃から高速は木立の中を走って行くのですが、今日は一面銀世界。枯れ木には白い雪の花が咲き、たわわに垂れ下がり、時々顔をだす常緑樹の松並木は所々雪に覆われ、クリスマスツリーの様です。向かう先には軽くグレーがかった雪煙がたち、まるでおとぎの世界に入っていくかのようです。

「君は白雪姫で、僕は小人かなあ」

白雪姫はいささかとうが立ち皺深くなり、小人は7人分をまとめたように大きな小人ですが、しばし夢を見ることにしましょう。

それにしても、先週終わった、巷の子供達の習慣のハロウィンは、今年は、いささか異議ありの盛り上がりがないものとなってしまいました。何しろハロウィンの日は雨風が強く、吹き降りだったため、子供達が可哀相だ、と母親や学校の先生から、翌日にハロウィンをしようと提案が持ち出され、当日は取りやめ翌日に先送りにした家庭が多かったのです。

一方、メディアでは、

「これは伝統的習慣で、雨が降っても雪が降っても、いつも、この日に近所の家を回ってお菓子を貰ったものだ」

と、過保護に非難の声があがりました。地区によって個人的に予定通り回る子供と翌日に回る子供に分かれてしまいました。受け入れる家は、どうせ来そうもないからと当日はカボチャを引っ込める家も多かったようです。ハロウィンの日には荒天候で子供が来ず、次の日は2日もやっでられないとカボチャをださずドアを閉めてお菓子配りをしなかったりで、結局、子供たちははどの日もお菓子をもらい損ね、盛り上がりませんでした。

ところが、子供から抜けきれない大人達は、暖かな小春日和の翌日に仮装して夜の街で盛り上がったのです。ナイトクラブ、バー、パブなど繁華街の一角は色とりどりの、わーっと驚く姿の若者で溢れていました。何だか若者のハロウィンは楽しそうです。ものすごいバイタリティーです。お化けも骸骨も太刀打ちできそうもありません。街の中を通りがかった、娘を送り届け中のドリトル先生は、群がる若者の中で寒空にほぼ裸の可愛い女の子に気を取られ、ハンドルがお留守になりそうでした。

「パパ、どこ行くつもり？そっちじゃないよ、私の家は。」

娘は思わず笑い出してしまいました。

「あーそうだった？君もあの群れに入らない？」

「もう無理。エネルギー無し。若くないから。そろそろ34歳よ、私。」

マダム田中もドリトル先生も思わず飛び上がってしまいそうでした。自分の年を感じるのは子供達の年を聞く時かもしれません。我が家のあのベベが34歳!! といえば、先月は(義理の)長男の40歳の誕生日でした。あのけたたましくハイテンパーで喋り続けた長男がすっかり穏やかに間をおいて話すようになり、年かなあとと思ったばかりでした。彼の40歳の誕生日は、フレデリクトンから出てきた次男一家とドリトル先生の前妻、つま母親も加え、全員集合の誕生日会でした。彼女が持ってきたお祝い的一本50ドルのボルドーの赤ワインのテイスティングとなり、酔いが回ったせいか、途端に話しに花が咲き始めました。

「あんなに穏やかで楽しそうなアニー(義理の息子達はママン(母)とは呼ばずいつも名前でよんでいるのです)見たことがないんだ。嬉しくてビデオにしておいたんだ」

と、長男はドリトル先生にそっと耳打ちしていました。これほど似ているのにこれほど折り合いの悪い親子(母、息子)も珍しいかもしれません。遠い昔からの出来事が蘇ってくるような気がします。

そうこう話に花が咲いているうちにトロントに着きました。トロントは、カナダの経済の鍵を握る英語系の経済都市です。イギリス風の建物や高層ビルやタワーマンションが立ち並び豊かさを語っているかのようです。同じ英語系でも、首都オタワは完全にバイリンガルで英仏二言語をどこでも話しますが、ここは話すのは英語のみです。移民が目立って多く、郊外には中国語のみで暮らせる中国人町があったり、韓国街があったりインド系も多いようです。

驚いたのは、ダウンタウンの夕暮れの街並みの明かりが控え目で、暗闇に淋しく沈み込んでいることです。色とりどりのライトアップであちこちの通りや歴史建造物や有名建築やタワーマンションが闇に浮かび上がり、キラキラと輝き眩しいほどのモンリオールの商店街比べると何と密やかなのでしょうか。

「あれこんなに暗かったけ、トロントって？」

トロントは久しぶりのマダム田中はやや疑心暗鬼です。経済成長が停滞しているのかもしれませんが。あるいは、美や外見にこだわる観光都市のモンリオールはライトアップで町の演出に成功したのかもしれませんが。それとも、フランスの影響のモンリオールとすっかりアメリカナイズされ、対岸のアメリカのようになってしまったトロントの違いなのかもしれません。

ドリトル先生は剣道大会出席やカナダ昇段審査会と剣道で忙しい週末を過ごすことになっています。

